

私の宗教的信条

私の友人たちへ

1953年12月

私がバハイであるということをご存知の方もいますが、そうでない方にはバハイという名は奇妙なものでしょう。ともあれ私は、できるだけ簡単に、バハオラの説いた世界信教が、私にとってどのような意義をもっているかをお話しなければならないという、内なる義務を感じています。

私には、自分が芸術家として生きてきたと認めてよいかどうか分かりませんが、少しの純粋な天分と、東洋と西洋の融合という偉大な道における不思議な役目を与えられてきたと思っています。けれど昨年来、美術工芸における東西の融合は、バハオラが説いた人類の一体性及び成熟という壮大なヴィジョンのほんの断片にすぎず、私の第二の道は第一の道に依存しているのですから、私はその中心をなすものに向かって行かなければならないと考えるようになりました。それは、宗教を顧じてきた一連の預言者の中で、最も時代の新しい預言者としてバハオラを認めるということでした。

モーセ、クリシュナ、ゾロアスター、仏陀、キリスト、ムハンマド、そして私が信じるバブとバハオラという偉大な人物たちは、全ての聖人や詩人、芸術家、哲学者たちの先頭に立ち、人類の進化の道における里程標として、人類にその愛と光を注いできました。いかなる王侯や征服者、また天才の力をもってしても、これらの偉大な人たちが人類の歴史を通して及ぼしてきたその影響力に勝ることはできません。しかし、昼は夜に変わり、人々は彼らの教えを自らの卑小な目的に合うよう歪曲してきました。この荒廃は、ヨーロッパにおいてはルネッサンスと共に始まり、宗教改革を引き起こし、産業主義、物質主義、そして個人主義へと進んでいきました。私たちは、二つの世界大戦が終わった今も、原子爆弾の惨害を逃れることができるかどうかさえ分からない状態にあり、苦勞して勝ち得た民主主義をもってしても、現代のジレンマに対する答えを提示できずにいます。

私たちには愛も光もなく、皆、小さな自我の殻の中に自らを閉じ込めているために、光が輝いてもそれを認めることができずにいます。キリスト教の光は、諸大陸が交わる東方より輝きました。バハオラの光は一世紀前、ペルシャとパレスチナの地に輝きました。バハオラは、全ての宗教の創始者たちの教えを認めて統合し、世界の平和と和合を実現するための真の基盤を提供しています。現在の私たちは、呼び名はなんであれ、神という共通の存在を喪失してしまっているといえます。キリストや仏陀の教えさえ、謙虚な気持ちで聞くということをしなくなっています。このような状態では、他に理由がなくとも、三度目の世界大戦を経験しなければならなくなるでしょう。人類は、このような戦争に膨大なエネルギーを注いできました。バハオラは、他の先駆者たちと同様に、人間は預言者を通してのみ、神という計り知れない存在の本質を多少なりとも理解することができるかと述べています。また、この世紀には、世界平和の実現と人類全体としての成熟が始まるとも述べています。彼は、多くの書物を書き残しました。また、人間と神との関係、人間と人間との関係、そして人間の自己に対する関係に基盤を置いた世界秩序を築くための完全なプランを残しています。その信者たちは、今や世界中至る所で、静かにバハオラの説いた道を広めており、その書物は、約60カ国に翻訳されています。

私は、第一世界大戦初期の東京で、アグネス・アレキサンダーというアメリカ人女性からバハイという名を初めて聞きました。私たちが日本にやってきた理由を尋ねると、彼女は、「あなた方には理解できないでしょうけれど、ある年長いたペルシャの紳士に日本へ行くようにと言われたからです。」と答えました。私は、その時の彼女の静かな微笑みに心を打たれました。その年長いた紳士とは、この信教の創始者バハオラの長子アブドル・バハでした。その時の私にはよく分かりませんでしたが、何年か後、イギリスのデボンシャーにあるダーティントン・ホールで、アメリカの芸術家マーク・トービーに出会い、彼を通してバハイ信教について深く知るようになりました。東洋と西洋の融合、偉大な諸宗教の関連性、真の美術と工芸には祈りの意味があるという教え、男女の平等、偏見と迷信の除去、聖職者制度の廃止、極端な貧富の差の除去など、その教えの大部分は、初めから私に強く訴えるところがありました。しかしながら私は、自ら人生と芸術の意味を考え理解することを求める個人主義者であり、詩人や画家、神秘主義者に惹かれてもおり、トービーがイギリスに滞在している間は、彼の説く教えに抵抗していました。私は、プロパガンダに押されているように感じ、また、啓示や宗教的権威に対する反感を感じていました。しかし、自分一人になって考えてみると、その教えの創始者バハオラの徹底した無私無欲と、その教えが信者たちの心につけた火を忘れることはできないと思いました。その教えのために何千もの人たちが、近代ペルシャの腐敗した状況の中で、輝かしい忍従の心をもって迫害と殉教を受け入れたのです。それは、初期キリスト教の殉教者たちの歴史が、同様の大義のために、イスラム教の環境において繰り返されたものでした。

バハオラの先駆者アリ・ムハンマド（ペルシャ語で「門」を意味する「バブ」と呼ばれる）は、僅か6年の布教の後に銃殺の刑に処され、バハオラとその長子アブドル・バハは、40年もの間牢獄につながれていました。それにも拘らず、この普遍的教えは、人類がその教えを最も必要としている時代に、パレスチナの古い要塞の地アッカの牢獄の中から広まっていったのです。しかし、バハオラがそれ以前に出現した他の預言者たちと同一であるというばかりか、キリストの再来でもあるという主張は途方もないもので、その後何年もの間、懐疑主義的思考をする私には容易に認めることはできませんでした。しかし最終的には、公然と信教を受け入れました。それでも、この問題については密かに躊躇する気持ちが残っており、私がバハイとして活動することにも影響していたのですが、昨年になってようやくその迷いが消えました。私は、この変化を全て論理的に説明することはできないだろうと思います。それは、芸術体験を全て論理的に説明できないのと同じことです。この変化は、柳宗悦と浜田庄司と共に旅をしたことの一年の間に、半信半疑のバハイとしてだけでなく、芸術家であり工芸家である私の経験を通して起きました。

それは、1952年、ダーティントン・ホールで開催された国際工芸家大会で始まりました。そこで私は、セントアイヴィスにある私の工房で感じていたよりも更にはっきりと、世界が必要としている、新しく生きた作品を制作している工芸家はほんの一握りに過ぎないということを実感しました。彼らはバケツの中のほんの一滴、それも純粋とは言えない一滴に過ぎません。というのも、これらの進取の気質を持った工芸家たちは、普通でないがために、詩人や画家たちと同様、ほとんど孤立しているからです。彼らは、人生の風に歪められた樹木のようにもあります。

私たちは、セントアイヴィスの工房で過去15年間にわたり、私たちのような普通の人々が必要とするものに応えるためには何を制作したら良いかという点で、共通の考えをもつ工芸家たちの共同体を形成しようとしてきました。その目指すものは、全人格から生まれる作品、頭や手からだけでなく、心から生まれる作品です。この共同体は、今では私や息子のデイヴィッドが指導し

なくても独立して仕事をしていますが、私が個人的に始めた伝統にどれだけ新しい息吹を吹き込むことができるかは、これからわかることです。デイヴィッドと私は、この試みの年月を通して、イギリスやペルシャ、日本、中国、韓国等、どこの国であろうと、その国の無名の陶工たちによって製作された壺に、統一性と恒常性という美を与えてきた共通の価値観である「伝統」という作品の背後にある生活の重要性に気づきました。私たちは、このような作品を賞賛し、真似て製作しましたが、私たち自身はこうした伝統から遠ざかってしまっていました。双方の作品を比較してみると、私たちの壺は製作されたもののよう見え、彼らのものは生まれ出たもののよう見えしました。ダーティントンの大会では、世界中の工芸家たちが同様の変化と困難を体験していることを知りました。

更にアメリカに到着すると、私たちは、根もなく、協力しようとする意欲も力もない、何千もの自意識の強い工芸家たちに会いました。私たちは、これが極端な機械化に対する反動であることに気づき、過度の個人主義に対する私の嫌悪感もまた強まりました。私は、輝きたいという願望があまり現れておらず、個人の力よりも更に大きな力を感じることのできる芸術を最も称賛します。なぜなら、そこでは「我」が輝くのではなく、芸術作品が輝くからです。私は、同行した二人から多くを学びました。特に、柳（宗悦）からは言葉を、浜田（庄司）からは行動することを学びました。

ニューヨークでは、鈴木大拙博士と長時間にわたる思い出深い会見を持つことができました。私が博士に、禅と真宗について、また、自己発見という孤独な道である「自力道」と、謙虚という広大な道である「他力道」について尋ねると、博士は、この二つの道に相矛盾するところはないと答え、仏教の精髓は、「ありのまま」の世界に顕在する、一見対峙するものの背後にあるということ、個人の歩む道は困難であり、どちらの道も牢獄につながれているようなものであるが、人が自分を「他の力」に委ねれば委ねるほど、その人は救われるのだと説いてくれました。私は一歩近づいたのです。

私は日本で、古来の真実と工芸における美が、それらを生み出した生活と共に死につつあることに気づきました。日本の文化は、戦争が始まる以前に既に西洋文明に敗北していたのです。現代の歴史家アーノルド・トインビーがこのことを明快に説明しています。日本は、産業化に向かって一目散に進み、その伝統という底辺を失ったのです。この過程において、今日世界で最も統一され、広範に普及しているといえる日本の近代工芸運動が起こりました、しかし、この運動の中で、西洋と東洋の間に横たわる隔たりをつなぐ橋をかけるのに成功している創造的工芸家は、ほんの数名にすぎません。彼らは皆開拓者であり、「禅」の人々です。彼らが行く先々で、人々は彼らの真似をします。しかし所詮彼らは、西洋においてと同様、バケツの中の一滴でしかありません。それは個人主義を育てるものであり、社会が必要とするものに応える先駆けにはなりません。浜田のような人が、50カ所もの伝統的な窯場に行き、当惑している工芸家たちに、何をすべきか、何をすべきでないかということをお教えることはできないのです。自らも芸術家あるいは工芸家として誠実に仕事をし、尚且つ潜在的能力を持つ一握りの選ばれた工芸家たちが自分の道を探すのを助けるためには、一人の人間の一生涯とエネルギーを必要とします。

このような人が、もしも無私無欲であり、リーダーシップを持ち合わせているならば、チームを作り、グループで仕事ができますし、またそうすべきであると私は信じています。なぜなら、それが手工芸本来のあり方だからです。それが、正しい方向へ向かう一歩なのです。しかし、産業革命

以前は普通のことであったこのことが、本当に今日、日常の品々に普遍的な真の美をもたらすことができると思えることはできません。どの工芸家の仕事も、全ての人のためにあること。私にはそうすることによってのみ空のバケツは一杯になるように思えます。しかし、仲間と深く結ばれ、信念を共有していなければ、このように生き、仕事をすることはできません。トインビーは次のようにも言っています。―「この原子力の時代においては、（人類の）和合こそが、自己滅亡を防ぐための唯一の選択肢である」

私が信じているように、これが真実であるならば、人類の和合を導く道を探さなければなりません。本来これは、芸術というよりむしろ宗教の領域です。和合を達成するためには、宗教がそれ自体の中に、既存の諸宗教の真髄を含有していることが基本的に必要となります。宗教は文化を創造し、文化は独自の伝統と芸術を創造します。しかし、宗教は、その靈感の源は神であると断言する、偉大な預言者によって与えられてきました。バハイは、そのような預言者を神の「顕示者」と呼んでいます。私は、バハオラもそのような「顕示者」であり、彼の使命は、現代の人類社会が必要とする精神的基盤を与えることであったと信じています。

私が確信をもったバハイになる過程において、過去に蓄積してきた信念を捨てるということは、自分の中心にあった自己というものを「他の力」すなわち「神」に置き換えることでした。すると、その結果は不思議なものでした。まるでジグソーパズルの一片一片が、あたかも自然に納まるべき場所に納まり始めたのです。

バーナード・リーチ